

氏名(本籍)	寺石悦章(埼玉県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第1,311号
学位授与年月日	平成7年3月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
審査研究科	哲学・思想研究科
学位論文題目	Kumārila 著 <i>Ślokavārttika</i> , Nirāmbanavāda 章・Śūnyavāda 章の研究
主査	筑波大学教授 文学博士 川崎 信定
副査	筑波大学教授 博士(文学) 竹村 牧男
副査	筑波大学助教授 文学博士 堀池 信夫
副査	筑波大学助教授 棚次 正和
副査	東京大学教授 Ph. D. 角田 太作

論 文 の 要 旨

クマーリラ (Kumārila) は、インドにおけるバラモン教正統六学派の一派であるミーマーンサー (Mīmāṃsā) 学派に属する、西暦紀元後七世紀前半ごろに活躍したと考えられる代表的学匠であり、その思想的影響力はインドの哲学・宗教思想界全体において後代に至るまできわめて大きいものがある。それだけに、彼の思想内容の究明は、仏教を含めてのインド思想解明のために確固たる基盤を提供するものであり、総合的で精密な学術的研究が求められる重要な研究領域である。

本論文は、このようなクマーリラの思想究明を目的として、彼の主要な著作の一つである『シュローカ・ヴァールティカ *Ślokavārttika*』(以下 ŚV と略記) の中から、彼が鋭い仏教批判を展開している「ニルアーランバナ・ヴァーダ Nirāmbanavāda (無所縁を説く主張の考察の章)」と「シューニャ・ヴァーダ Śūnyavāda (空を説く主張の考察の章)」の二章を取り上げて、外界実在・非実在の論争の解明を中心に、その哲学・宗教思想を文献学的方法を用いて研究したものである。

本論文の構成は次の通りである。

第1部 「研究」

序論 問題の所在および従来の研究の状況

第1章 Nirāmbanavāda 章・Śūnyavāda 章の基礎的考察

第2章 Nirāmbanavāda 章・Śūnyavāda 章に示されたクマーリラの見解

第3章 Nirāmbanavāda 章・Śūnyavāda 章とディグナーガの見解との関連

結論 クマーリラが批判した仏教思想の内容

附論 引用文献の一覧とSVとの関連の考察

第2部 「翻訳研究」

第1章 Nirāmbanavāda 章(1) 章の構成と外界非実在論の区分 (vv. 1-19 ab)

第2章 Nirāmbanavāda 章(2) 推理による外界非実在論とその批判 (vv. 19 cd-201)

第3章 Śūnyavāda 章(1) 直接知覚による外界非実在論とその批判 (vv. 1-259 ab)

第4章 Śūnyavāda 章(2) 結論: 外界非実在論と知識非実在論 (vv. 259 cd-264)

第1部の序論において、著者は、従来のクマーリラ思想研究の状況を概観し、これまでの研究が仏教諸学派の論書との関連が密接な箇所の個別研究に限られ、そのため Nirāmbanavāda 章(以下 Nir 章と略記)・Śūnyavāda 章(以下 Śū 章と略記)全般におけるクマーリラの論述意図や、そこで批判されている見解が如何なる論書に由来するかなどをはじめとする重要問題の考究が欠落していた事実を指摘する。そしてその反省の上に立って、本論文では Nir 章・Śū 章全体を SV の中においてきわめて体系的に叙述をなしているものとして捉え、その構成と内容を明らかにする目的と方法とを提示する。

第1章においては Nir 章・Śū 章を全体的に検討するための前提となる事項について考察し、Nir 章・Śū 章を構成する個々の議論が、それぞれ独立性を保持しながらも相互に密接に関連し、Nir 章・Śū 章全体の中で特定の地位と役割とが与えられている、構成上の特質と意義を論証する。すなわち、Nir 章・Śū 章において、外界がヴァスツ(実在)であるか、アヴァスツ(非実在)であるかが主要な問題として論じられるが、この中でクマーリラは、ミーマーンサー学派の外界実在論の立場から仏教の外界非実在論を批判している。ここで本論文の著者は、外界実在論を基盤としたクマーリラの六種類のプラマーナ(認識手段)のそれぞれとの関連において Nir 章・Śū 章の二章が設定されている構造を分析し、その特徴を提示している。

次に、SV に先行するミーマーンサー学派の論書『シャバラ・パーシュヤ』(以下 ŚBh と略記)中の叙述と、これに対応するクマーリラの上記二章における議論とを比較分析して、クマーリラによる外界非実在論論破に、先行する ŚBh に見いだすことのできない、彼に特徴的な展開があることを指摘している。

第2章においては、「非実在」、「認識の対象」、「直接知覚」、「推理」の四概念に関するクマーリラの見解が明確にされる。このための作業として、Nir 章・Śū 章全体からそれぞれの概念と関連する偈頌を蒐集して、その内容が検討される。非実在は認識の対象とはならず、仏教徒の説く外界非実在論に依拠するかぎりにおいては、直接知覚およびそれに基づく他の認識手段が成立せず、外界の実在に基づかない知識がすべて虚偽となり、解脱の必須要件であるダルマ(法)の探求が不可能になる。外界の事物の存在とそれを認識する知の仕組み・アーカーラ(形象)・認識手段についての、ミーマーンサー学匠のクマーリラの見解を明らかにする試みが、著者によって Nir 章・Śū 章の二章の記述に沿いつつ、示されている。

第3章においては、Nir 章・Śū 章の主要な議論のいずれもディグナーガ(Dignāga, 陳那480~540

年ごろ)の見解を批判したものであることが明らかにされる。仏教の唯識学派に属するディグナーガは、外界の実在を前提としない立場から認識論・論理学・言語哲学等に関する体系を構築した。クマーリラのŚVの Nir 章・Śū 章の最大の課題は、このディグナーガの外界非実在論を批判し、論破することにあつた。まず、外界の非実在を推理に基づいて論証するディグナーガを批判するものとして、Nir 章の第23偈に代表される論証式が設定されていることを、本論文の著者は指摘する。そして、この論証式は ŚBh の一節をクマーリラが修正した上で作成したものであり、その際にディグナーガの見解が参照されている事実を、ディグナーガの著作から文献的に、また諸注釈者の言及を掲げながら、論証している。また、ディグナーガの直接知覚による非実在論を批判するクマーリラの立場を示すものが Śū 章であり、そこに提示されている直接知覚の対象が知識であることを主張する五種の見解の重要部分がいずれもディグナーガの見解に他ならないことを論証している。

結論としては、Nir 章・Śū 章の二章によってクマーリラが批判した仏教思想の内容が、ディグナーガに辿れること、また当時の論理学の知識の上から、これら二章がきわめて整合性をもって体系的に構成されており、二章を合わせての全体がクマーリラによって明確な意図の下に著述されていたことが確認されるとしている。

本論文の第2部は、全4章から構成され、Nir 章・Śū 章全体の和訳研究である。推理による外界非実在論を批判した第2章、および直接知覚による外界非実在論を批判した第3章を中心に、その前後の部分それぞれ第1章・第4章に区分し、原典における偈頌の順序にしたがって Nir 章・Śū 章の全460余偈にわたって、校訂サンスクリット・テキストとそれに基づく和訳・訳注、関連文献とその内容の分析と検討が提示されている。

審 査 の 要 旨

従来ともすれば仏教側からの限られた関心に基づく個別的研究に終始していた研究対象に対して、本論文の著者はサンスクリット語原典を丹念に読解し、先行研究の成果を整理・検討し、その上に立脚して、クマーリラ自身の思想を体系的に捉えようと試みた。その成果として、クマーリラの ŚV 全体系における Nir 章・Śū 章の二章の位置づけと意義とが明確にされた。すなわち、ミーマンサー学派の主張する外界実在論の立場から仏教側の外界非実在論を論破する意図のもとに、同学派の設定するプラマーナ(認識手段)の枠組みに沿って整合性と体系性を備えた論述がクマーリラによってなされており、上記二章間には密接で必然的な連関性があることが著者によって明らかにされた。また、ŚBh との比較によって、ŚV においてクマーリラの独自の関心・問題意識の発展が見られることを具体的に提示できたことも著者の業績となっている。さらに、ディグナーガの著述からの引用の指摘と、諸注釈者の「ディグナーガ・アーチャーリヤ」への言及を例証として掲げた、精密な論証によって、Nir 章・Śū 章の主要な論議のいずれも仏教論理学者ディグナーガの見解を批判したものであることが明らかにされた。

以上の成果は、従来個別的に研究され、指摘されてきた問題の総括として、またこれまで大著の故

もあって体系的に取り組まれることの少なかったクマーラ述作の総合的研究の出発点として、インドにおける知識論・論理思想研究の今後の進展のための貴重な基盤を提示したものとして評価できる。

特に第2部において試みられた Nir 章・Śū 章の二章全体にわたるサンスクリット語テキストとそれに対応する翻訳研究および関連するチベット語訳テキストの注記などの文献学的研究は、将来において、より整備された形態において刊行されるならば、資料的価値ある労作として学界を裨益するものとなるが大いに期待できる。

なお将来の課題としては、叙述の明確化、目次・引用・注記などの体裁、訳語の検討と統一など細部にわたって推敲の要がある。また各章における論証の具体的方法およびその全体構成においても、不備な点を多々残している。さらには、上記二章の ŚV 全体との関連の把握がまだ不十分であること、「実在」・「存在」を論ずる際に ŚV 中の「アバーヴァ（非存在の論証）」の章との関連を考慮すべきであること、および ŚV の諸注釈を依用する際の採用方針が明確に提示されていないこと等、今後に残された検討の課題も多い。ここに示された外界実在・非実在の議論展開が、ミーマーンサー学派・仏教の世界形成論・形而上学・知識論・論理思想において、いかなる位置づけを持つのかにまで踏み込んだ、広い見通しを示しうるような積極的研究で将来あってほしいと、望蜀の願いを持つものである。

以上に指摘されるような将来への課題と多くの問題点を残すにもかかわらず、本論文においては、博士論文として十分な創意と厳密な研究が加えられており、学界への寄与と貢献をなすものとして高く評価される。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。